随　想

望　　楼

有　山　正　孝
（電気通信大学教授）
（電気火災調査知識ベースシステム研究委員会委員長）

消防といえば火の見櫓を思い浮かべるのはもう年輩の者に限られるのであろうか。何年か前までは，田舎の村の辻には半鐘を吊した素朴な火の見が立っていたものである。大都市でも消防署に望楼はつきものであった。中でも東京大塚仲町の旧小石川消防署の望楼はなかなか風情があり，また私にとっては特に思い出が深い。なぜかというと50年程前，私が小学校一年生の時，通学の途上毎日その前を通り，しかも入学式の数日後のある朝，何とそのすぐ隣で小火があって，電車通りにはホースが引きめぐらされて通行止となり，おかげで初めて消防活動の現場に遭遇するとともに初めての遅刻をしたからである。

ところで望楼の目的は言うまでもなく目視による火災情報の収集であろう。しかし望楼もいまやビルの谷間に没して無用の長物と化し，電話通報が主役となったようだ。ただし119番通報の大部分は救急の要請である。これは一般に外から見つけにくいから，電話通報によるのは当然である。電話通報は通報者が動転していて要領を得ないことが多いという。一部で実用化されている発信自動検索システムや自動通報システムの，一層の進歩と普及が望まれる所以である。

電話通報の利用は受け身の態勢である。火元の側からの働きかけを待たずに火災を見つけるには，高い所から見下ろすに限る。例えば「火の見飛行船」を常時空に浮かべておくとか，あるいは「火の見衛星」を打ち上げるのはどうだろう。今日の技術では人工衛星から火災の発生を知ることもさほど困難ではない筈である。電話利用は平常時には良いけれど，大地震などの広域災害で火災が多発する状況になったり，電話網そのものに支障を生じたりすると，機能しなくなる。そういう場合には，高い所から見るという原点に帰ることが必要になるだろう。

さて消防とは火災とのたたかいである。いくさに勝つには情報が大事である。そういうことから，近年コンピュータを用いて受付指令台と連動して各種の情報を提供するシステムの開発が多く見られるようになった。前記の発信自動検索システムと連動させると一層有効である。さらに出場の指令や出場部隊の編成までもコンピュータで自動的に行なう試みも，実用化されている。

このような次第で，近年は消防とコンピュータないし情報工学との関係も深くなってきた。その結果，私のような者が思いがけなく消防関係の方々と知り合い，一緒に仕事をする機会を得るようになったのである。

最後に夢物語をもう一つ。高層ビルや大規模な地下街の防災のために，小型の自走式知能ロボット消防車を配備した出張所を設けるのはどうだろうか。ビルの中なら立体駐車場式にすれば容易に火災の階に出動できる。そのような消防署に望楼はいらない。